

令和4・5年度 唐津市教育委員会指定 「いきいき学ぶからつっ子育成事業」(2年次)

唐津市立浜玉中学校 公開授業

本校研究主題・副主題

学ぶ楽しさを実感し、主体的に学び続ける生徒の育成
— 学びを子ども自らが調整することを視点においた授業改善を通して —

1 期日 令和5年11月2日(木)

2 日程

13:15～ 受付開始
13:30～13:50 全体会(体育館)
13:50～ 休憩・移動
14:00～14:50 公開授業(各教室)
14:50～ 休憩
15:00～15:20 研究協議(各教室)
15:20～ 休憩・移動
15:30～16:30 講演(体育館)

3 内容

(1) 全体会(体育館)

本校研究主任による研究概要の説明

(2) 公開授業

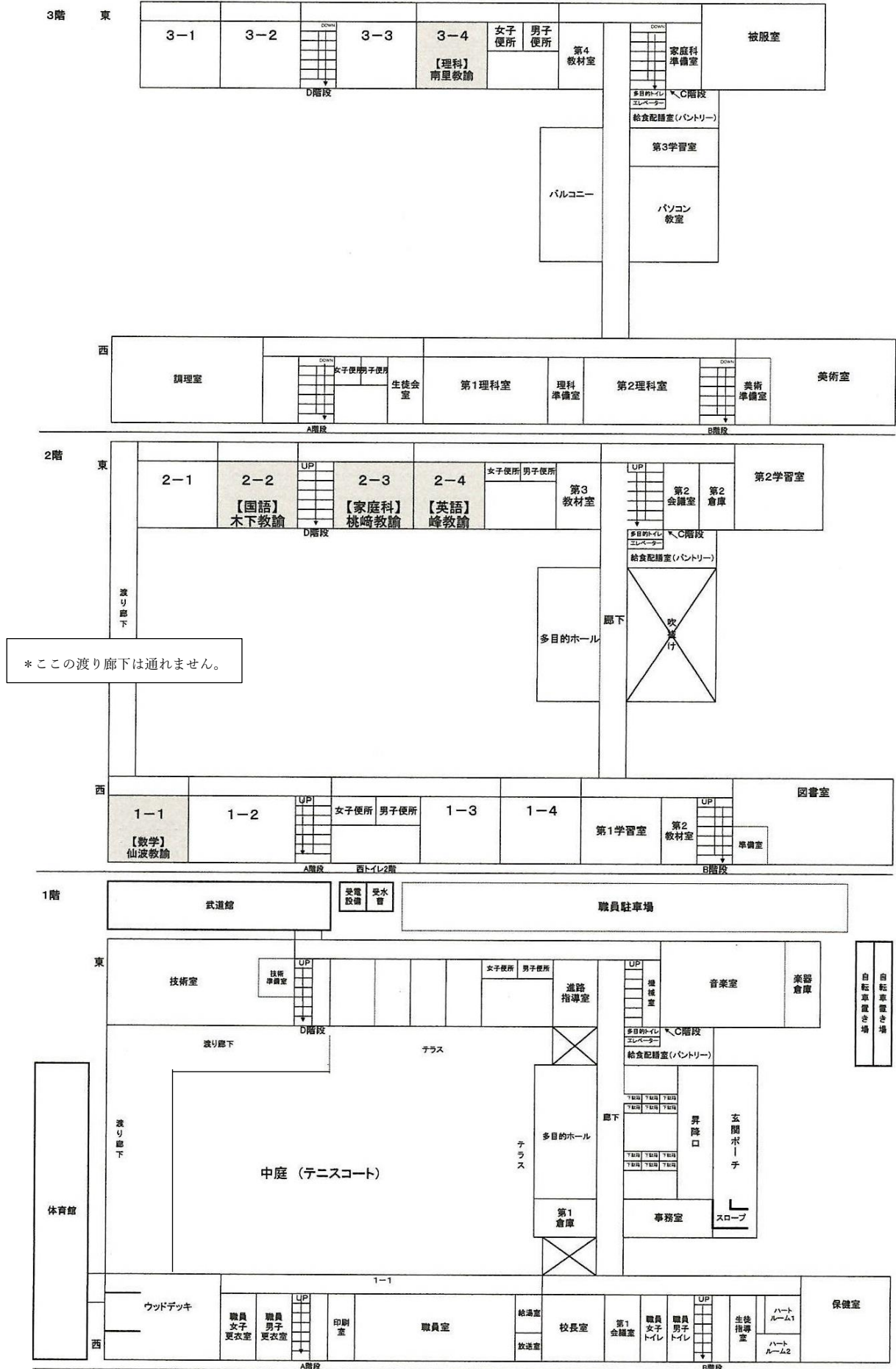
教科	学級	授業者	単元名
国語	2年2組	木下 真智子	根拠を吟味して意見文を書こう
理科	3年4組	南里 有人	単元4 化学変化とイオン
英語	2年4組	峰 真二	Unit5 Universal Design
数学	1年1組	仙波 颯人	3章 方程式
技術・家庭	2年3組	桃崎 純子	食品の選択と購入

(3) 研究協議

(4) 講演(体育館)

大妻女子大学榊山敏郎教授による講演

教室配置図



令和5年度（2023年度） 浜玉中学校校内研究計画

1 研究主題

「 学ぶ楽しさを実感し、主体的に学び続ける生徒の育成 」

－ 学びを子ども自らが調整することを視点においた授業改善を通して －

2 主題設定の理由

唐津地区では、令和4年度から6年間を見通した「いきいき学ぶからつっ子育成事業に係る学力向上研究会」が実施されている。その目的は、市が示す「唐津の学びスタイル」に基づき、全市統一の授業改善を更に推進すること、児童生徒の個別最適な学びと協働的な学び、1人1台のタブレット端末の利活用を推進するため、学力向上指定校や学力向上推進委員会、各校の授業改善を推進する職員との相互の連携強化を行い、市内全小中学校へ広めることである。

本地区では、計画6年間の初めとなる令和4・5年度の2年間の学力向上指定校となったことを踏まえ、次の4年間につなげるためのより良い実践が求められている。令和4年度より、本校は市の学力向上の指定を受け、研究主題を一新し、学力向上と郷土学習、キャリア教育に重点を置き、地域連携を継続した主題を設定した。また、令和4年10月より大妻女子大学樺山敏郎教授が提唱するラーニング・マウンテン（Learning・Mountain）（以下L・Mとする）を導入した。そして本校では、L・Mを全職員で作成して授業実践を行い、令和4年11月に数学、英語、社会、技術・家庭科の4教科で唐津地区に向けての公開授業を行った。教師と生徒で学びを可視化できたという成果があると同時に、L・Mが年度の途中で入ったこともあり、普段の授業とどのように結びつけるかが課題となった。

令和5年度では、令和4年度の成果と課題を踏まえ、学びを可視化できるL・Mを年度の最初から全教科で実践を行うこととした。そして、本校では学力向上のための主体的に学ぶ態度の要素である子どもの学びの調整に重点を置き、全教科による授業改善を研究副主題に設定した。

3 研究目標

- (1) 授業づくり部会の取り組みとして、L・Mを活用した授業改善を通して、自らの理解状況に応じて学習を調整できる生徒の育成を目指す。
- (2) 基礎基本部会の取り組みとして、基礎基本を学ぶ能力とした授業改善を通して、友達や教師等の他者と協働的に学ぼうとする生徒の育成を目指す。
- (3) GIGA部会の取り組みとして、1人1台端末を活用した授業改善を通して、ICTを活用できる生徒の育成を目指す。

4 研究の仮説

全教科でL・Mを活用することや、基礎基本を学ぶ姿勢を育成すること、そして1人1台のタブレット端末を活用することといった3つの目標を通して、生徒が自らの学習の進捗状況を調整することを視点においた授業改善を教師が図ることで、主体的に取り組む生徒を育成することができるであろう。

5 研究方法

授業づくり部会では、樺山教授が提唱するL・Mを授業の中で活用した。L・Mとは、山登りをイメージし、目指すゴールと学びのプロセスデザインを可視化し、学びの見通しをもつことができる学習計画である。導入段階で生徒たちと学習課題を設定し、教師は評価内容を伝えていく。生徒たちは単元のゴールとして身に付ける資質・能力を見通すことができる。L・Mによって、育成すべき資質・能力を目指した主体的・対話的で深い学びの実現につながる個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実へとつながっていくと考えられ、全教科において、教師がL・Mを授業で活用した。本校で実践してきたL・Mをもとに、生徒の学びの調整を更に促すために、生徒にL・Mを書かせたり、教師の自作の教材と関連付けさせたりしていく。それを全職員で共有して、活用しての気づきや、今後の取り組み等を話し合い、生徒の学びの調整を促す授業づくりの改善につなげる。

基礎基本部会では、学年集会や学年としての取り組みの際に、また朝の会や帰りの会、学活等の時間を使い、学年の様々な教師から対人関係スキルの指導を行う。また、全教科でも取り組みを行う。教科の特性や教師の個性を活かすことを優先し、生徒が友達や教師と共に学ぶことを促すことを目指す。また、各教科の教師が協働的な学びを意識する機会を増やし、対人関係スキルの更なる向上を期待する

G I G A部会では、まずは生徒が1人1台端末を活用できる環境を整えること、次に授業の中で1人1台端末を活用できる場面を入れていく取り組みを行う。また、教師が1人1台端末を活用しやすくする環境整備やI C Tを活用できている教師の活動を紹介していく取り組みを行う。

6 研究組織

研究組織は図1のとおりである。研究の計画や企画・立案の検討と研究の方向性の決定を行う研究推進委員会の下、全教職員が所属する研究の主体として活動する全体研究会があり、全体研究会は3部会に分かれている。

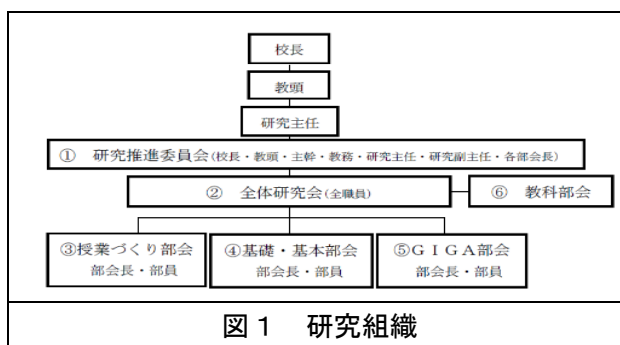


図1 研究組織

7 計画

月	全体会	授業づくり部会	基礎基本部会	G I G A部会
4	第1回	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の研究について ・今年度の研究方針の確認をしたうえで組織づくり ・L・Mの作成 		
		<ul style="list-style-type: none"> ・4月末に第1回生徒アンケートを実施 		
5	第2回	<ul style="list-style-type: none"> ・L・Mを作成し提示できたことの確認 ・教師が率先してL・Mの作成と提示することの確認 ・可能なら、子どもにL・Mに書き込ませる、もしくはL・Mを作成させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聴くことの職員の共通認識 ・「聴く力」の育成方法の確認と協議 ・帰りの会や学活等の時間を活用 ・アサーションや対人関係スキルの確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師同士の Teams の連携 ・1年生へのG I G A端末の整備に向けて ・授業研究会としての Forms の活用
6	第3回	<ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じてL・Mの作成の見直し ・L・Mの考え方の活用に向けての協議 	<ul style="list-style-type: none"> ・「聴く」ことを生徒とともに確認する方法の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・Forms を活用した授業研究会
7		<ul style="list-style-type: none"> ・7月中旬に第2回生徒アンケートを実施 		
8	第4回	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期の研究の成果と課題（7月末に実施した第2回アンケートの結果を共有、4月末と比較） ・学習状況調査等の分析 		
9	第5回	<ul style="list-style-type: none"> ・L・Mとその考え方の活用に向けての確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・「聴く」力を身に付けるための手立ての確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・G I G A端末を生徒と教師が活用できるための手立ての確認
10	第6回	<ul style="list-style-type: none"> ・L・Mとその考え方の活用に向けての確認 ・11月2日研究発表会に向けての検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・「聴く」力を身に付けるための手立ての確認 ・11月2日研究発表会に向けての検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・G I G A端末を生徒と教師が活用できるための手立ての確認 ・11月2日研究発表会に向けての検討
11	第7回	<ul style="list-style-type: none"> ・L・Mとその考え方の活用に向けての確認 ・11月2日研究発表会の反省 	<ul style="list-style-type: none"> ・「聴く」力を身に付けるための手立ての確認 ・11月2日研究発表会の反省 	<ul style="list-style-type: none"> ・G I G A端末を生徒と教師が活用できるための手立ての確認 ・11月2日研究発表会の反省
12	第8回	<ul style="list-style-type: none"> ・2学期の取り組みのまとめ ・12月中旬に第3回生徒アンケートを実施 		
	冬季休業	<ul style="list-style-type: none"> ・第3回生徒アンケートの結果を共有 		
1	第9回	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の研究の成果と課題の分析 		
2	第10回	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の研究の成果と課題の分析 		
3	第11回	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の活動のまとめ ・次年度当初の準備引継ぎ等 		

木下真智子教諭の国語科のラーニング・マウンテン（単元）

単元名：根拠を吟味して意見文を書こう「地図の意見文」

☆自分の「単元の目標」

☆自分の学習の振り返り

- ・「自分の単元目標」は達成できましたか？
- ・特に頑張ったところはどんなことですか？
- ・学習前と学習後の自分の考え方を比べて、あなたの考え方はどのように変わりましたか？
- ・自分の考えが変わったことについてどう思いますか？

組 号 氏名

④意見文を書き、読み合う（2）

つけたい力

- 意見と根拠など、情報と情報との関係の理解
- 根拠の適切さを考える
- 説得力を増すために、説明や具体例を加える

③お互いの根拠を吟味し合う（1）

本時

②自分の立場を決め、根拠を考え吟味する（3）

私は A ショッピングモール B スポーツセンター の中に新設すべきだと思う。

①単元の流れを理解し、自分の単元の目標を立てる

木下真智子教諭の国語科のラーニング・マウンテン（本時）

学習課題

（みんなで解決したい問い）

書き出した根拠を班で読み合い、お互いの根拠が具体的に適切であるかを考えよう。

分かること・できること

- ・情報と情報との関係を図式化して、自分の思考を明確にすることができる。

【評価】step 2 ワークシート

考えること・表すこと

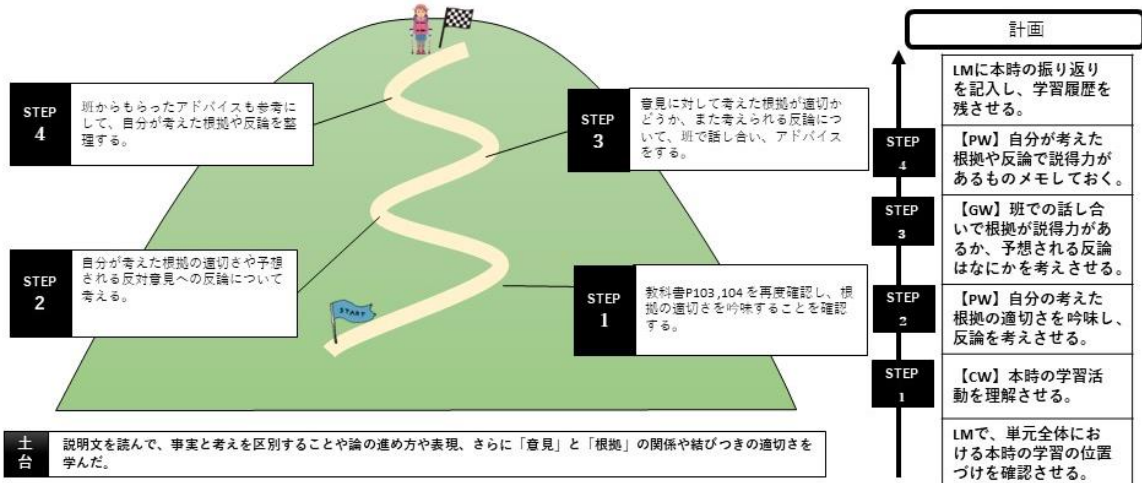
- ・説得力を増すために、考えや意見の根拠となることを具体的に記述することや反論を考えることができる。

【評価】step 4 ワークシート

工夫して学ぼうとすること

- ・根拠を吟味することに粘り強く取り組み、班で協力しながら意見を出し合い、よりよい意見文を書こうとしている。

【評価】Step 3 話し合い



木下真智子教諭の国語科の授業づくりのポイント

視点	目的	目的のためにとる手だて
主体的な 学びの調整 <small>(授業づくり部会)</small>	ア) 生徒が自分で立てた単元の目標を達成できるようになる。 イ) 生徒一人一人が、単元での学習にあったレポートや課題に意欲的に取り組むようになる。	ア) 教師がL・Mを活用して、学習の見通しを生徒に持たせる。また、ステップ途中で、ゴールをイメージさせる。 イ) 単元の学びを生かし、表現できる学習活動を仕組む。
対話的な 学びの調整 <small>(基礎基本部会)</small>	ウ) 生徒同士で必要な内容を話し合い、検討できるようになる。 エ) 生徒が自分の作品はもちろん、他者の作品をよりよくするための適切な推敲や助言を行うことができる。	ウ) 教師が観点を明確にして、生徒に話し合いを行わせる。 エ) 教師が評価の観点などを明確にし、よりよくするための視点を生徒に持たせる。
I C Tの活用 <small>(G I G A部会)</small>	オ) 生徒がレポートや課題において適切に調べ活動ができる。 カ) 生徒が自分の考えを周囲に伝えるプレゼンテーションができる。	オ) レポートの課題を一部 Teams で生徒に提出させる。 カ) 生徒が自分の考えを整理するために図表を活用し、考えを表現できる場を教師が作る。

本時の授業の視点

目的のためにとった手段はどうだったか。

【目的①】 生徒が単元のゴールまでの見通しをもつことができるようするために、

【手段①】 L・Mに、単元の目標を生徒自身に設定させる。

【目的②】 生徒が前時までの学習を本時に生かすことができるようにするために、

【手段②】 L・Mに学習内容の要点や学習履歴を記入させる。

【目的③】 生徒がお互いに根拠の適切さを考えることができるようにするために、

【手段③】 生徒自身が図式化してまとめた資料でお互いに助言をさせる。

* 上記の目的達成のためにとっている手段は、浜玉中の生徒にどのような効果を与えているかを見ていただくと嬉しいです。

南里有人教諭の理科のラーニング・マウンテン（単元）

年 組 号 名 前

学習テーマ 化学変化をイオンのモデルと関連付けながら、見通しをもって観察、実験を行う。また、仮説の検証や結果の分析から、化学変化における規則性や関係性を見いだして表現し、科学的に探究する。

分かること・できること	考えること・表すこと	工夫して学ぼうとすること
化学変化をイオンのモデルと関連付けながら、水溶液とイオン、化学変化と電池を理解しているとともに、それらの観察、実験などに関する技能を身に付けている。	化学変化について、見通しをもって観察、実験などを行い、イオンと関連付けてその結果を分析して解釈し、化学変化における規則性や関係性を見いだして表現している。また、探究の過程を振り返っている。	化学変化とイオンに関する事象・現象に進んで関わり、見通しをもったり振り返ったりするなど、科学的に探究しようとしている。

STEP 2

【2章】化学変化と電池
P. 184～197

①イオンへのなりやすさ
②電池とイオン
③いろいろな電池

【評価】章のテスト、振り返り

STEP 3

【3章】酸・アルカリとイオン
P. 198～223

①酸・アルカリ
②中和と塩
③探究活動

【評価】章のテスト、振り返り

STEP 1

【1章】水溶液とイオン
P. 164～183

①電流が流れる水溶液
②原子とイオン

【評価】章のテスト、振り返り

【これまでの化学分野の学習】 中学1年生では、身のまわりの物質や気体の性質について学習している。そして、中学2年生では、化学変化と原子・分子について学習している。さらに、電流とその利用の学習のなかで、電流の正体が電子の流れであることも学習している。

各章でどんなことを学ぼうですか？

【おわり】

【3章】

【2章】

【1章】

【はじめ】

南里有人教諭の理科のラーニング・マウンテン（本時）

年 組 号 名 前

学習テーマ 原子が電気的に中性であることは、陽子と電子の数が関係しているのか科学的に探究しよう。

分かること・できること	考えること・表すこと	工夫して学ぼうとすること
原子のつくりについて、基本的な概念を理解し、知識を身に付けることができる。	原子の構造について仮説を立て、動画視聴を通して、原子の構造について説明することができる。	学習の過程ではたらかせた理科の見方・考え方についてふれ、学習の振り返りを行うことができる。

STEP 2

【展開】原子の構造をつかむ
P. 176

①QRコードを読み取り、動画を視聴する。
(Tru Capture・Edpuzzle・ワークシート)

②動画を視聴しながら問題に取り組む。
(Edpuzzle)

【評価】原子の構造について仮説を立て、動画視聴を通して、原子の構造について理解し、説明することができたか。（思考力）

STEP 3

【終末】学習内容の演習・まとめ
P. 176

①クイズ方式で学習の定着を回す。
(Kahoot!)

②本時の振り返りを行う。
(Tru Capture・Forms)

【評価】主：学習の過程ではたらかせた理科の見方・考え方についてふれ、学習の振り返りを行うことができたか。（主体的に学習に取り組む態度）

STEP 1

【導入】既習内容の振り返りとめあての確認
P. 176

①全ての物質が原子からできていることについて確認する。

②めあてを把握する。

③原子のつくりについて予想を立てる。

【これまでの化学分野の学習】 電解質が水溶液中で電離していることをイオンのモデルを使って学んだ。また、陽イオンと陰イオンについても学んだ。

【おわり】

【3章】

【2章】

【1章】

【はじめ】

南里有人教諭の理科の授業づくりのポイント

視点	目的	目的のためにとる手だて
主体的な 学びの調整 (授業づくり部会)	ア) 生徒が見通しをもつことができる。 イ) 生徒が自分の学習段階に応じたL・Mを作成することができる。	ア) 教師がL・Mを活用して、学びの目的と意味を生徒につかませる。 イ) 生徒それぞれの学習の自己調整の段階に応じてL・Mを生徒に書かせる場面を教師が作る。
対話的な 学びの調整 (基礎基本部会)	ウ) 生徒が協働的な学びを展開することができる。 エ) 生徒の代表者発表を通して、生徒が班活動を充実できる。	ウ) 教師が学習段階に応じた課題の設定をする。 エ) 生徒にはワールドカフェ形式で班活動を行わせる。
I C Tの活用 (G I G A部会)	オ) 生徒が必要に応じて学習用端末を活用することができる。 カ) 生徒がタイピング力の向上及びプレゼン発表の資料作成ができる。	オ) 生徒自身の学習の調整具合に応じて、生徒に学習用端末を活用させる。 カ) 生徒にタイピングコンテンツの活用をさせる。

本時の授業の視点

目的のためにとった手段はどうだったか。

【目的①】 生徒が学びの見通しをもちやすくするために、

【手段①】 L・Mを子どもたちと教師で共有する。

【目的②】 目に見えない原子の構造や大きさを、生徒が説明できるようにするために、

【手段②】 1人1台学習用タブレット型端末を用いて、QRコードで読み取った動画を視聴し視覚的にイメージさせる。

【目的③】 生徒が楽しく学習活動に参加して、更に生徒が学習の定着を図れるようにするために、

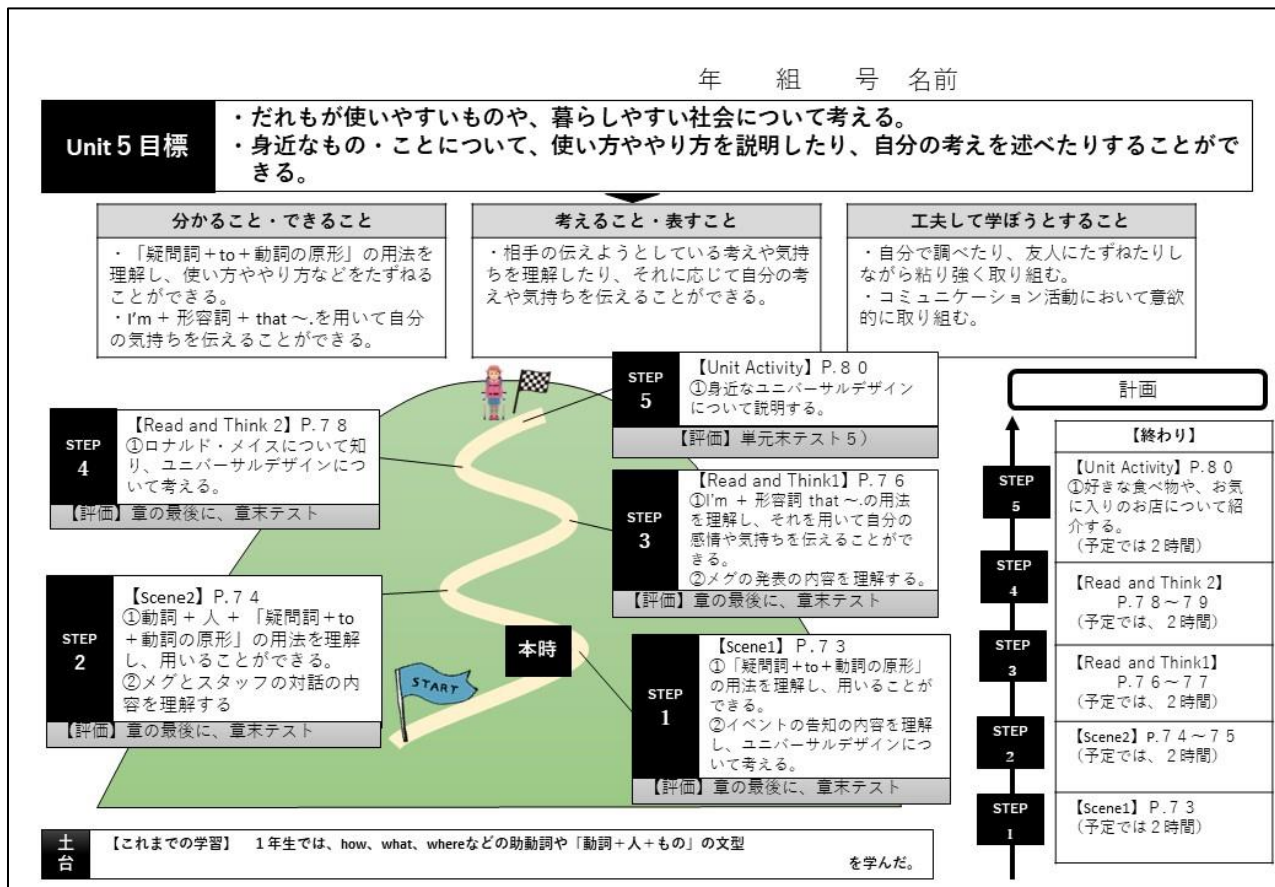
【手段③】 原子の構造に関するクイズを Kahoot! で出題する。

【目的④】 生徒が科学的な思考や活動ができるようにするために、

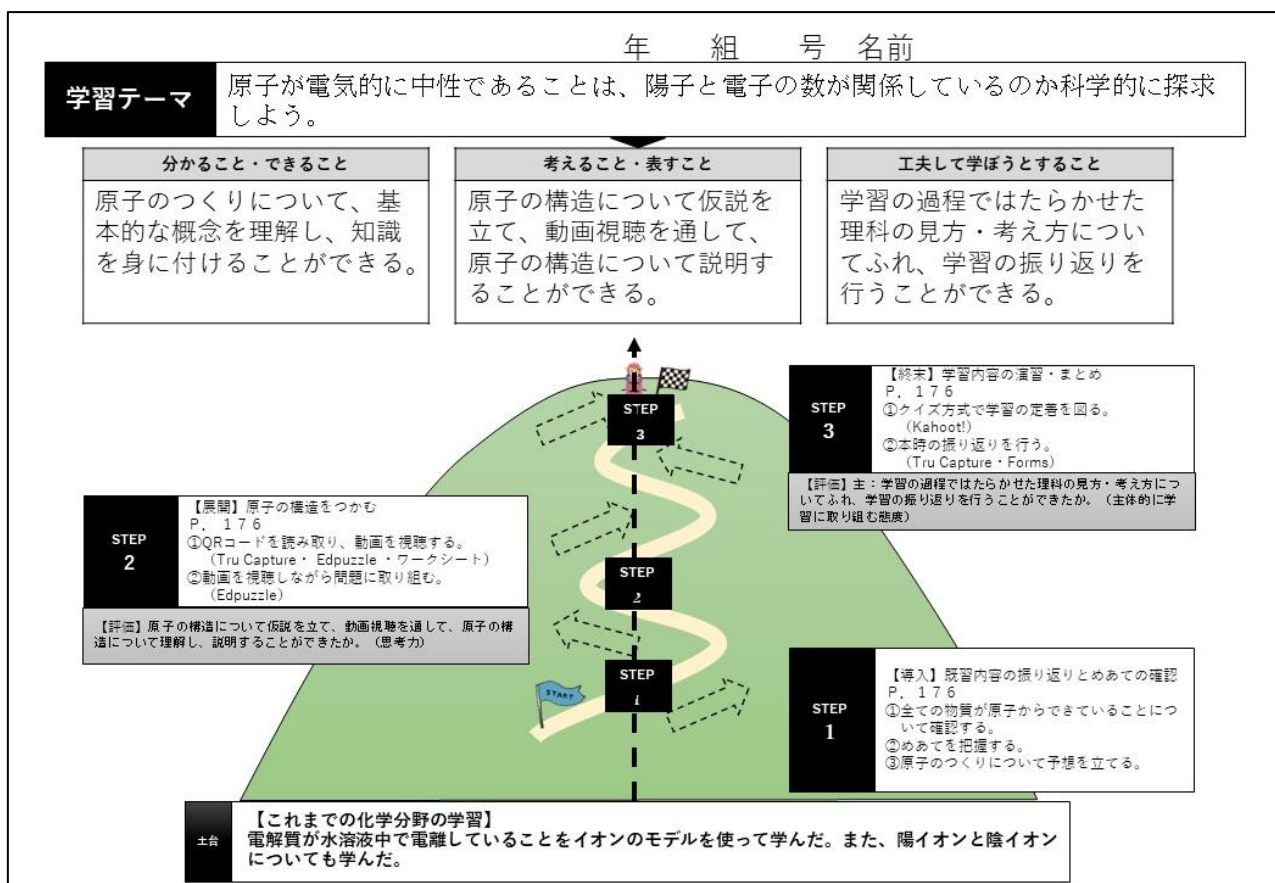
【手段④】 学習の過程ではたらかせた理科の見方・考え方についてふれ、学習の振り返りを行う。

*上記の目的達成のためにとっている手段は、浜玉中の生徒にどのような効果を与えているかを見ていただけると嬉しいです。

峰真二教諭の英語科のラーニング・マウンテン（単元）



峰真二教諭の英語科のラーニング・マウンテン（本時）



峰真二教諭の英語科の授業づくりのポイント

視点	目的	目的のためにとる手だて
主体的な 学びの調整 <small>(授業づくり部会)</small>	ア) 生徒が単元の目標を常に意識し、その達成のために自分自身で調整できる。	ア) 授業のはじめにL・Mを教師が提示し、現時点の学びと目標を生徒に意識させる。生徒にL・Mの書き込みをさせる。
対話的な 学びの調整 <small>(基礎基本部会)</small>	イ) 生徒が他者の発言を聞き、考え、反応することができる。また、質問したり、意見を交わしたりすることができる。 ウ) 単元の目標達成のために、生徒が互いに協力したり調整したりできる。	イ) 生徒に英語での対話活動をさせる。その際に、間違いを恐れず、また間違えても繰り返し対話活動を行うように教師が促す。 ウ) 目標達成のため道順を生徒自身が考え実践する場を教師が設定する。
I C Tの活用 <small>(G I G A部会)</small>	エ) 生徒が必要に応じて1人1台端末を用いて目標達成の一助にできる。 オ) 1人1台端末を用いて、自分やグループの作品や考えを発信できる。 カ) 生徒が単元の目標を常に意識し、その達成のために生徒自身で調整できる。	エ) 必要に応じて適時生徒に使用させる。1人1台端末で自分の考えや作品を発表できるような活動を教師が設定する。 オ) 目標達成のために1人1台端末を生徒に使わせる。 カ) 電子黒板を活用し授業のはじめに教師がL・Mを提示し、現在地と目標を生徒に意識させる。

本時の授業の視点

目的のためにとった手段はどうだったか。

【目的①】 生徒が学びの見通しをもちやすくするために、

【手段①】 L・Mを生徒たちと教師で共有する。

【目的②】 生徒が学び続けることができるようにするために、

【手段②】 生徒同士が互いに協力したり、自分で調整したりしながら取り組ませる。

【目的③】 1人でも多くの生徒が理解できるようにするために、

【手段③】 生徒にはわからないままで終わらせず互いに尋ねたり教え合ったりさせる。

*上記の目的達成のために行っている手段は、浜玉中の生徒にどのような効果を与えているかを見ていただけると嬉しいです。

仙波颯人教諭の数学科のラーニング・マウンテン（単元）

課題	2つの会社で、料金が同じになるのは何分話したときだろうか。	会社名	基本料金	1分間の通話料
		コトモ社	1100円	20円
		U.A社	950円	30円

分かること・できること	考えること・表すこと	工夫して学ぼうとすること
<ul style="list-style-type: none"> 方程式の必要性和意味及び方程式の中の文字や解の意味を理解すること。 簡単な方程式、比例式を解くこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 等式の性質をもとにして、方程式を解く方法を考察し表現すること。 方程式、比例式を具体的な場面で活用すること。 	<ul style="list-style-type: none"> 粘り強く問題を解決しようとしている。 教科書やプリント、問題集を使って課題を解決しようとしている。 学習の履歴を使って、何を学習したか、ふり返ろうとしている。 仲間と協力し、問題を解決しようとしている。 前回のテストより1点でも多く点数を取ろうとしている。 問題を解決できたら、さらに難しい問題に挑戦しようとしている。

終わった授業は蛍光ペンで印をつけておこう！

○わかった！OK！ →青
 △びみよう...復習しようかな... →黄色
 ☆わからなかった...絶対復習する！ →赤色

STEP 1

方程式

- ①方程式とその解
- ②方程式とその性質
- ③移項して解く1
- ④移項して解く2
- ⑤いろいろな方程式
- ⑥比例式

本時

STEP 2

方程式の利用

- ⑦代金の問題
- ⑧過不足の問題
- ⑨みはしの問題
- ⑩比例式の利用

土台 【これまでの学習】 2章「文字と式」、1章「正の数・負の数」

仙波颯人教諭の数学科のラーニング・マウンテン（本時）

課題	問題演習を通して、3章の学習内容を復習し、1次方程式の理解を更に深める。			
-----------	--------------------------------------	--	--	--

分かること・できること	考えること・表すこと	工夫して学ぼうとすること
<ul style="list-style-type: none"> 方程式の必要性和意味及び方程式の中の文字や解の意味を理解すること。 簡単な方程式、比例式を解くこと。 <p>【評価】 Step1・Step2</p>	<ul style="list-style-type: none"> 等式の性質をもとにして、方程式を解く方法を考察し表現すること。 方程式、比例式を具体的な場面で活用すること。 <p>【評価】 Step2</p>	<ul style="list-style-type: none"> 粘り強く問題を解決しようとしている。 教科書やプリント、問題集を使って課題を解決しようとしている。 学習の履歴を使って、何を学習したか、ふり返ろうとしている。 仲間と協力し、問題を解決しようとしている。 前回のテストより1点でも多く点数を取ろうとしている。 問題を解決できたら、さらに難しい問題に挑戦しようとしている。 <p>【評価】 Step3</p>

STEP 1

導入

めあての確認
3章の学習内容の復習

STEP 2

展開

課題①～課題⑤を演習する

STEP 3

終末

取り組みを振り返る

土台 【これまでの学習】 3章「方程式」 2章「文字と式」、1章「正の数・負の数」

仙波颯人教諭の数学科の授業づくりのポイント

視点	目的	目的のためにとる手だて
主体的な 学びの調整 (授業づくり部会)	<p>ア) 生徒が授業前にどこまで学習したかを理解してから学習に取り組むことができる。</p> <p>イ) L・Mを生徒が自分で確認し、単元テストや実力テスト、入試に向けて、自分のすべきことを理解することができる。</p> <p>ウ) 生徒が誰がどこまで課題が終わっているか、確認することができる。</p>	<p>ア) 授業前や毎回の授業で、L・Mの提示を教師が行う。また、教師が作成したL・Mと連携した振り返りシートに振り返りを生徒に書き込ませる。タブレットに演習の進捗状況を記録させる。</p> <p>イ) 教師から生徒に「〇〇ができていなかったら、ここまで降りてもいいんじゃない?」「□□までできているなら、ここまで登ってみてもいいんじゃない?」というような状況に応じた声掛けを進んで行う。また、生徒が自分の習熟度に合わせて学習できる時間の確保を教師が行う。</p> <p>ウ) 進捗状況を生徒に入力させ、電子黒板に表示する。</p>
対話的な 学びの調整 (基礎基本部会)	<p>エ) 班員とコミュニケーションをとることができる。</p> <p>オ) 授業中に「わからない」、「ここを教えてほしい」、「ここはこうするんだよ」といった会話が自然と生徒から出るようになる。</p>	<p>エ) 号車ごとの班をつくらせ、頼れる仲間を増やす。</p> <p>オ) 「わかりたい」と思えるような授業づくりや班を作るなど話せる環境づくりを教師が行う。</p>
ICTの活用 (GIGA部会)	<p>カ) 生徒がFormsでのアンケート記入ができる。</p> <p>キ) 調べ学習の一つの手段として、生徒がタブレットを用いることができる。</p> <p>ク) 適切にICTを使うための判断力を生徒が身につける。</p>	<p>カ) アンケート機能を教師が使う。</p> <p>キ) タイピングをする時間を教師がつくる。</p> <p>ク) Kahoot!などで興味を引き、「わかりたい」と思えるように教師が工夫する。また、ルールを書いた紙をキャビネットに貼る。</p>

本時の授業の視点

目的のためにとった手段はどうだったか。

【目的①】 生徒が自らの学びを調整できるようにするために、

【手段①】 L・Mと連携した振り返りシートに記述を生徒にさせる。

【目的②】 生徒が分からない問題があるときに自分に合った方法で学習を進めることができるようになるために、

【手段②】 分からないことを「分からない」と言いやすい環境をつくる声掛けを教師が行う。

*上記の目的達成のために行っている手段は、浜玉中の生徒にどのような効果を与えているかを見ていただくと嬉しいです。

桃崎純子教諭の家庭科のラーニング・マウンテン（単元）

家庭科	学習ポートフォリオ	名前	教諭 桃崎 純子
単元計画	自立に必要な食を営む力をつけよう 3章：調理のための食品の選択と購入 教P.44～51		

めあて
食品の選択と購入のために必要な情報について理解し、自分の考えをもって、食品を適切に選択できるようになる

学習の見通し

STEP 1 【こんな「力」を身につけよう！】
食品を購入する時の注意点を考える

STEP 2 【こんな「力」を身につけよう！】
生鮮食品の特徴や表示の内容について知る

STEP 3 【こんな「力」を身につけよう！】
加工食品の特徴や表示の内容について知る

STEP 4 【こんな「力」を身につけよう！】
食品の適切で安全な扱い方について知る

STEP 5 【こんな「力」を身につけよう！】
自分の考えをもち、食品を適切に選択できるようになる

5(本時)

この単元の学習前の生徒のすがた

- 生活の中で食事が果たす役割や健康に良い食習慣について学んだ
- 栄養素の種類と働き、身近な食品の栄養的な特徴について学んだ
- 中学生に必要な食品の種類と概量を踏まえ、工夫して1日分の献立を作成した

桃崎純子教諭の家庭科のラーニング・マウンテン（本時）

11/2	学習ポートフォリオ	名前	教諭 桃崎 純子
2-3 5時間目	自立に必要な食を営む力をつけよう 3章：調理のための食品の選択と購入 教P.44～		

めあて
自分の考えをもち、食品を適切に選択できるようになる

学習の見通し

現在

- 栄養バランスを考えた1日分の献立を立てた
- 食品を選ぶ時のポイントを学んだ
- 生鮮食品の特徴を踏まえ、表示の読み取り方を学んだ
- 加工食品の特徴を踏まえ、表示やマークの読み取り方を学んだ
- 食品の適切で安全な扱い方を学んだ

食品を選ぶ時のポイントを確認する

カレーライスとラーメンのそれぞれの食品ごとにメリット・デメリットを班で話し合う
↓
発表し、クラスで共有する

各班の発表を聞き、食品を選ぶ時のポイントを再確認する
↓
自分の班の意見を再考する

これまでの学習を振り返って生活に活かせることをまとめる

4

評価	わかること・できること	考えること・表すこと	工夫して学ぼうとすること
	食品を選択する時のポイントをおさえながら、食品ごとにメリット・デメリットをあげることができる	デメリットに関しては解決策を考え、論理的に説明できる	班で協力しながら意見を出し、友達に伝えたり、自分の言葉でまとめたりすることができる

桃崎純子教諭の家庭科の授業づくりのポイント

視点	目的	目的のためにとる手だて
主体的な 学びの調整 (授業づくり部会)	<p>ア) 生徒が学んだ後に自分なりの成長を自分自身で確認することができる。</p> <p>イ) 学習したことを使って、実生活で工夫しながら生徒が生活できる。</p> <p>ウ) 生徒が次は何を学習するのか、把握できる。</p> <p>エ) 生徒が学びの途中で、学びの修正ができる。</p> <p>オ) 生徒が授業の中で、主体的にL・Mに書き込むことができる。</p>	<p>ア) L・Mに分かったことを青ペンで書くように指示している。また単元の途中や最後にL・Mを使って振り返る場面を教師が設定する。</p> <p>イ) 毎時間、授業の終わりに「生活に生かしたいこと」を生徒に記述させる。実際に生活と結びつけることによって、知識だけに終わらせないようにしている。長期休みには、実践課題の場を教師が多く与えている。</p> <p>ウ) 単元のL・Mを単元の授業の最初に渡し、目指す姿を生徒に設定させる。今現在、自分が分かっていることやできていることを踏まえたうえで、何を学習すれば目指す姿に近づけるかをL・Mの項目(チェックポイント)を生徒にあげさせる。</p> <p>エ) あらかじめ立てたL・Mのチェックポイント(何を学習すればよいかのポイント)を単元の途中で書き加えたり、書き直したりを生徒に赤ペンで記入させる。</p> <p>オ) 学んだ知識をその都度L・Mに書き込めるように、「L・Mにのこしておくといいね」と声掛けを教師が行う。</p>
対話的な 学びの調整 (基礎基本部会)	<p>カ) 生徒同士で互いに学ぶことができる。また、一つの課題について班内で意見を出し合ったり、討論したりできる。</p> <p>キ) 被服実習で、ペアで、班で、班をこえて、生徒が教え合うことができる。</p> <p>ク) 生徒が教師に疑問を聞くことができる。</p> <p>ケ) 生徒が、分かればうなずき、分からないときは分からないと反応できるようになる。</p>	<p>カ) 3～4人の班を作り、全員が発言して1つの課題に取り組ませやすくする工夫を教師が行っている。</p> <p>キ) 生徒には2人で1台ミシンを使わせることによって、友達の進度もわかり、教え合いができやすい環境を教師が作っている。早く作業工程が終わった人は、友達に教えて、教え合った内容も振り返りに書かせるようにしている。</p> <p>ク) 生徒が活動しているときは、教師は教室を机間指導しており、個別の対応をしやすくしている。授業終了後の振り返りで、疑問点などを書くことができ、疑問点に対しての返信も行っている。</p> <p>ケ) 受け身だけでなく、理解の有無や疑問点を自分から表現できるように、教師が声掛けをしていく。</p>
I C Tの活用 (G I G A部会)	<p>コ) 生徒がタブレットPCを使って、授業を円滑に受けることができる。</p> <p>サ) 個人や班で考えた課題を、生徒が教師に配信し、学級で共有できる。生徒が興味をもって、授業に参加できる。</p> <p>シ) 生徒が楽しみながら、これまで学んだ事柄の復習ができる。</p>	<p>コ) 授業に沿った内容(電子黒板と同じ内容)を、Teamsを使用し、生徒が手元で見られるようにしている。そうすることで、細かい部分や見逃した部分も確認できる。</p> <p>サ) オクリンクやPadletを使用し、個人や班で考えた課題を生徒に集めさせる。それを、学級全体でも共有できる場を教師が作る。</p> <p>シ) 電子黒板で動画を見せる。生徒に視覚的に訴えることで、生徒の興味関心を高める。教師がKahoot!を使用し、復習問題を作成する。</p>

本時の授業の視点

目的のためにとった手段はどうだったか。

【目的①】生徒が学びに見通しを持って生徒自らの学びを調整できるようにするために、

【手段①】L・Mを活用する。

【目的②】生徒同士が意見を共有・交流できるようにするために、

【手段②】Padletを活用する。

*上記の目的達成のためにとっている手段は、浜玉中の生徒にどのような効果を与えているかを見ていただくと嬉しいです。

< 浜玉中学校の研究概要・授業研究会・大妻女子大学樺山敏郎教授による講演メモ >

